

The Little Sister

これはフィクションで、実在の人物・団体とは全然関係ありません。

リトル・シスター

。地中海クリニックス

北海道の冬の訪れは唐突だ。それは夢から叩き起こされるように暴力的で脈絡がない。公孫樹の憂金色の葉が風で吹き飛ばれて私は鬱になった。

そもそも鬱症状があったわけでも、そういう気質であるわけでもなかったのだ、始めのうちは単なる寒さによる体力と気力の衰えとしか思っていなかった。一週間して、どうもこれを『鬱』というのではないかと、不安に駆られてきた。鬱病なんて、このストレスの多いコンピュータ関連の世界では職業病とまでいわれているが、いざ、自分がかかるとは思ってもいないので、とうとう私も病膏肓に入るの境地に達したかと感慨した。

とりあえず、私は病院に行ってみてみようと思ったが、いざ『精神病院』とか名のつくところにいくのは、さすがに気が引けた。そこで、カウンセリングのあるクリニックスに行くことにする。

『クリニックス』という言葉の響きは、毎日ボクシングジムに通い、水泳とジョギングで爽快に過ごしている人がちよつと捻挫をしていくような場所、といった健康的な感じがあつてよい。会社の診療室で健康保険のきく診療クリニックスを探してもらい、予約を取った。

オフィス街の中央通りから少し入った普通の事務所が入る凡庸なモダンなビルの二階に、そのクリニックスはある。『地中海クリニックス』という看板を出していて、いかにも疲れた心を癒してくれそうである。ガラス張りの扉からは受付の小窓が見えるだけで、待合室の内部は覗けない目隠しがあり、大きな力ポツクの植木鉢が枝を茂らせている。外見上なんの病院かも分からない。

朝一番に予約していったので、クリニックスの待合室には、誰もいなかった。くすんだ紫色を帯びたグレーの壁紙と程よい間接照明の待合室は、テレビドラマに出てくるようなソファと椅子がバラ

スよく配置されて、とてもシックな演出がされている。そこに薄いピンク色の白衣を着たスカート裾がやたら短い看護婦が今朝の新聞や雑誌をテーブルの上に綺麗に並べていた。

私に気がつく、「おはようございます」と挨拶して、診療室に入っ
ていき、そのまま受付の小窓から、ショートカットで少女の様な化粧のない顔をひよいと出すと、「ほくなん様ですね、どうぞ診療室にお入りください」と、促した。

診療室に入ると、いかにも『私は女医でございます』といった感じで、長い髪を背中であげたメガネの女医が、両肘椅子に深く腰を下ろして机に向かい、カルテに「こそこそと、なにかを書き付けている。彼女は振り向くと、「どうぞ、お座りください」と椅子を勧め、「どうなされましたか」と聞いた。女医はルフィミアぐらいの歳だろうか、大きく見開いた目はメガネの中で水槽の熱帯魚のようにくりくりと動いた。

「ええ、ちよつと、このごろ気分が憂鬱でして、鬱病じゃないかと心配で」と、私は率直に答えた。

女医は、「ふむ」と頷くと、私の年齢、職業、身長、体重、結婚の有無、食欲の有無、一日の睡眠時間に、一週間の性交渉の回数、趣味に収入、貯金残高と現在の所持金額、そのあと看護婦を呼んで、体温と血圧を測らせて、それらを事務的にカルテに記入していった。そしてまた、「ふむ」と呟き、「近頃、なにか変わったこととか、環境に変わったこととかは、ございませんか」と、聞いた。

私が「うーん」と腕組みして考えていると、「ここでお話された内容は、治療の目的以外には利用することはありませんし、また、外部に漏洩や、報告することもございませんから」と女医は言い、「常識ではちよつと信じてもらえないような事柄でも気にしないで下さい。宇宙人に誘拐されたといったことでも構わないのです。もちろん、これは極端な例なのですけれども」と、付け加えた。

しかし、そういわれると、本来は宇宙人にさらわれたと主張するような病人のくせに体面を取り繕っているのではないですかと、自

分が勘ぐられているようでもある。

「そういえば、この間温泉に行って温泉の水を飲みましたね。なにかやたら、おいしく感じたので、かなり飲んでしまいました」と、私は無難な内容を答えた。女医はカルテに「喉が渇く…」と、書き付けた。とても『笠原メイ』にまつわる一件を話す気にはなれなかった。

女医はまた「ふむ」と、唸ると机から体を起こして背筋を伸ばして机上の道具箱から薬を出して、「それでは、このお薬をお飲みください」と、私に手渡した。

「なんか、正露丸のような臭いがしますね」

「正露丸は、なんにでもよくきくですよ」

「正露丸なんですか？」

「こちらにお水がありますから、どうぞ」と、いった。

なにか馬鹿されたような気がして、帰り際にはもう、ピンクの白衣の看護婦が頭にはっぱを載せたキタキツネに見えてきた。

ピンクのキタキツネは受付の小窓から診察券を渡すと、「来週には検査結果がわかりますので、もう一度いらしてください」と、言っ
て微笑んだ。

。ルフィミアからの手紙

家に帰ると、丁寧な感じの封書が届いていた。郵便物ではないバツクに入っている。発送元はシドニーのハイアット・ホテルになっていた。

「とり急ぎ申し上げます。

ほくなん様には

ますますご健勝にお過ごしのことと拝察申し上げます。

突然にお手紙を差し上げましたご無礼をお許しください。

先だつては、大変ご迷惑をお掛けしました。

さて、わたくしは日本国外で様子を窺っておりましたが、先日のこと、例の件に関して、ひつじ牧場がある組織に、調査を依頼したとの情報を入手いたしました。

ほくなん様には、また、ご迷惑がかかりそうなのです。

詳しいことは後ほど、お伝えしようと存知ますが、

取り急ぎ、ご注意を申し上げますとお便りいたしました。

くれぐれも『女』にお気をつけください。

それでは、これから北海道も寒くなると存知ますので、お風邪など召しませぬように、ご自愛ください。

あらあらかしこ

るーちゃん（ルフィミア）「

ルフィミアの手紙を読んでいて、ふと、あのキタキツネ・クリニツクの女医の顔が思い浮かんだ。

「うーむ、『女』かあ、縁がないんだけどなあ」と、誰に言つてもなしに私は呟いた。

そのとき、電話が鳴った。

「もしもし、ほくなん様のお宅でしょうか」

「もしもし、私がほくなんですが」

「申し後れました、

わたくし地中海クリニックスの加納マルタと申します。

本日、ほくなん様の担当をさせていただいた者です」

これをシンクロニシティと言っのだろうか、あの女医の名前は『加納マルタ』というのか、そういえばなんと言っ名前かネームプレートを見ていれば分かったはずなのに、ぜんぜん気にもとめていなかった。

「その節はありがとうございました」

「ほくなん様、ただいまお時間をいただけますでしょうか？」

「なにか私は忘れ物でもしてましたか？」

「いえ、そうではございませんで、

実は緊急に調査いたしたいことがございまして、ほくなん様のご自宅に伺いたいのですが、ご都合はいかがでしょうか？」

「加納先生が直接いらっしやるのですか？」

「いえ、うちの看護婦をお邪魔させるつもりなのですが…」

「いつでも構いませんよ」

「そうですか、恐れ入ります。

どうしても調べておきたいことがございまして、なるべくご迷惑にならないように配慮いたします。

それではこれから伺わせますので、よろしくおねがいいたします」

思ったよりも、仕事熱心なクリニックスであると感心した。私は『キタキツネ・クリニックス』などと、馬鹿にして悪かったなと、少し反省した。

テレビを見ながら、会社から持ち帰ってきた仕事の書類をいくつか片付けているうちに、『地中海クリニックス』の看護婦が来た。裾丈の短いスカートのピンクの白衣姿を想像していたが、考えてみると、そんな格好で外を歩くはずもなく、現れた彼女は墨のように黒いカシミアの靴のかかとまで隠れそうな長いコートを着ていた。

頭にはロシア人がかぶる毛皮の帽子を深々と着けている。そして、

田舎で医者が行く診に行くときに持つような黒い革の大きなかばんを手を下げている。

「夜分、お邪魔いたします。」

わたくしは地中海クリニックの助手をしております、加納クレタともうします」

そういうと、加納クレタは帽子とコートを脱いだ。コートの下には、なんと、害虫駆除作業員みたいなツナギの作業服を着ていた。足元はブーツではなくて、給食のおばさんが履くような黒い長靴である。

「ほくなん様、はじめにご自宅の飲み水のサンプルを、採取いたしたいのですが」と、言つて、黒いかばんから小さなガラス瓶を五、六本をつかみ出した。

私が「こつちに台所があります」と、指し示すと、長靴にビニールのカバーをつけて、「失礼します」と一礼し、そのままあがりこんできて、台所と洗面所と風呂の水道水をそれぞれのガラス瓶に取り分けた。

「水なんか調べて何かわかるのですか」

私は熱心に水道の蛇口から水をガラス瓶に取り分けては、照明に照らしてチェックしている加納クレタに聞いた。

「DHMOの含有量を調査するのです」

「DHMOって？」

「ダイヒドロ・モノキサイドのことですわ、多量に摂取すると死に至ることだってあるのです。」

去年の統計では全国で二千人以上の死者を出していますが、一般にはまだ、その危険が十分に認識されておりません」

「そんな危険なものが水道水に入っていたら

誰かが文句を言うでしょう」

「いいえ、それが現実社会のむずかしいところですよ」

もう現代の日本では、安全と水もタダではなくなっていたのだ。私はクラスターがどうのこうのと、いつて売りにくる浄水器を買わ

なければならぬのだろうか。

加納クレタは、つかつかと玄関にもどるとサンプルを大切そうにかばんにしまった。そして小首を傾げると、「ほくなん様、こんどはご自宅のチリを採取いたしたいのですが、ご了解いただけますか」と、いった。別に断る理由もないので「どうぞ」と言つと、今度はかばんから掃除機をだしてくるなり、家中を巡つてごみと塵を吸い込んだ。

あつけに取られてみている私をよそに、彼女はかばんの中から魔法のように次々と器具をだしては、私の家にあるありとあらゆるものを採取し、それから、手際よくそれら全てを片付けると、再び黒いコートと帽子を被った。

「ほくなん様

本日はご協力ありがとうございました。

作業は滞なく完了いたしました。

それでは来週のご来院をお待ち申し上げております」

加納クレタはぺこりとお辞儀をして帰っていった。

私の部屋に入ってきた記念すべき第一号のうら若き女性は、害虫駆除の作業服に身を包み、家中のチリとゴミを掃除機で吸い取っていったのだった。

。さつきとメイ

次の週、律儀にも、私は地中海クリニクへと出かけた。検査結果はどうでも良くなっていたが、とりあえず自宅を家捜しするような調査の弁解ぐらいは聞いておきたかった。

前回と同様に、診療開始前からやってきたのだが、今回は先客が待合室にいた。プロレスラーのような体格で、仕立てのよさそうなダブルの背広を着込んでいる。私が入っていても、目も呉れずに待合室に置いてあった週刊誌の記事を読んでいた。私はこの男の前に並べてあった週刊誌をひとつ摘み上げると、向かいに位置するソファに腰を下ろして、診察室から呼ばれるのを待った。今日は、あのピンク色の看護婦は姿を現さない、診察室の方も加納マルタとかいう女医の気配もない。

十分ぐらいいは、そうやっていただろうか、向かいの男が不意に、「おいっ」と呼んだ。一瞬、自分が呼ばれたものではないと思っているところを、「おいっ、小僧」と、もう一度呼んだ。

眼を雑誌から上げると、向かいの男が私を呼んだようだった。

「私のことですか」と声を出してみたが、喉が張り付いて妙に甲高い声になって待合室をまぬけに響いた。

「俺を覚えてるか？」と、男はまだ雑誌から眼を外さないで聞いてきた。静かだが、地の底から響いてくるような声だった。よくよく見ると、どうも『ひつじ牧場』の牧童頭という中川と名乗る男に似ている。私は生まれてこのかた、こんな体格の男に出会ったのは、中川が最初だったので、それ以外に考えつかなかった。

そこで、おそろおそろ男に尋ねてみた。

「もしかして、『ひつじ牧場』の中川さんですか？」

「おおっよ」

「小僧とは、少し酷くありませんか」

「ひとんちの娘をさらっていくような奴は、小僧で十分だろ」

そついうと、読んでいた雑誌をぱんと投げつけてきた。私はそれをうまく払いのけると、「メイのことを言っているのなら、ぼくじ

やありませんよ」と、突っぱねた。中川と眼が合った。別に怒っているようではなく、なにか年老いた母親をたった今亡くした男のように沈んだ眼をしていた。

そこに、白衣姿の加納マルタが現れた。加納マルタは持っていた書類の挟まったフォルダを中川に渡すと、中川の隣に座った。しまった、この連中はグルだったのか。

中川は渡された書類に、ぱらぱらと眼を通し、加納マルタに向かって小声で、「なんだ、シロか？」と、聞くと、加納マルタはこつくり頷いた。

「どうやら、家には連れ込んではいないようだな」と、中川は大声で検査の結果判定を読み上げるようにして言った。

「だから、ぼくは関係ありませんよ」と言うと、中川も加納マルタも、オマエが犯人に決まっているとばかりにじっと見返すのだった。

まったく、埒があかない。気が付くと、例のクマみたいな連中がアメリカ大統領のシークレット・サービスみたいに立ちはだかつて待合室の入り口を完全に塞いでいる。

中川は、パンと両手をはたいて合わせると、それを揉み手しながら私を宥めるような物腰で要件を切り出した。

「どうだ小僧、取引をしないか。」

五月の居場所か、連絡方法を教えろ。

そのかわり、俺が女ならいくらでも世話してやる。

どんな女でも構わん、女子高生だろうが、

人妻だろうが、金髪だっていい、

一度に三人一緒でも、一個連隊だっていいぞ、

そして、気に入らなかつたら何度でも取り替えてやる。

ただし、五月だけはダメだ。」

「『さつき』というのは彼女の名前ですか？

そんなことより、よく考えてください、ぼくは彼女の本当の名前も、今知ったような男なんですよ。」

そんな男がどうして、彼女をさらったりするのですか」

「でも、おまえが男であることには変わりはない。

男なんだから、好きな女はかっぱらっていて、自分のものにするのは当然だ、女の名前なんか関係あるもんか」

まあ、確かに正論ではある。しかし、そんな男だったら、とつくの昔に結婚しているんじゃないか、と反論したかったが、なんか自分で自分の言葉に傷ついて、立ち直れそうにない気がして、言葉を飲み込んだ。

「いいか、小僧、冷静になつて考えろ。

これは取引だ、ビジネスだ。

ちやんと、損益計算を考えなけりゃいけないんだ。

おまえみたいな小僧が五月を手に入れても、

ぜえーたついに、持て余すぞ。

ちよつと浮気しただけで、あいつは怒つて家をでてしまつぞ、

ぜえーたついに、尻に敷かれて苦勞するぞ、

それよりか選り取り好み、言いなりの女の方が、

ずうーといいぞつ、そんなこと俺が言わなくてもわかるだろお」

どうして『ひつじ牧場』関係者は、私の考えもしないような欲望を次から次へと並べて見せるのだろつか、笠原メイもアメリカの別荘地で、仕事もしないで遊んで暮らせるとか言っていたし、こんどは中川が品質保証つきハーレムの提供をちらつかせる。

こんな現実味の無い話がいかにも魅力の乏しいものであるかを、この人たちは理解できないようだ。一兆円の国家予算よりも百万円のボーナスの方がずつと人を引きつけるのである。

とりあえず、ムダだと思つたが、私は反論を試みることにした。

「しかし、どうしてそうまでして

『さつき』さんを束縛しようとするのですか、

彼女だって、もう十分に大人なんですから、

彼女の好きなようにさせてあげればいいじゃないですか」

「むつ、小僧、俺はなにも意固地で

五月を探してるんじゃないんだぞ、

五月はな、多忙で子供を構ってやれない五月の両親に代わって、

俺が育てた娘なんだ、

俺みたいなのに育てられたもんで、

本当はお嬢様なのにあんなにガサツになっちまったが、

とにかく、俺は育ての親としての責任を全うしたいんだ。

五月の花嫁姿が見たいんだよ、

でも、おまえなんかじゃダメだ」

中川は、そう言うのと、ごっつい顔の蔽ついた眼を潤ませた。

少し沈黙の間があつて、中川は何かを思いついたといったように、

「しょうがない、今日のところは帰してやる」と言つて、ソファー

から立ち上がった。そしてそのまま取り巻き連中に合図すると、待

合室から出て行つた。

私がほつと胸を撫で下ろしていると、クリニックの外から「小僧

っ、よく考えておくんだぞ」と、中川の声がした。

加納マルタは向かいの席で、なにが楽しいのか、にこにこして、

まだ座っていた。

。加納マルタ

私は夢を見た。夢の中で、私は『地中海クリニック』にいた。診察室の方で人の声がするので、私は釣られて入っていくと、診察室の奥には手術室があつて、そこでボソボソ話をしながらなにかの作業の音がする。

手術室には解剖台があり、解剖台の上にはバラバラにされた笠原メイのパーツが並んでいて、傍らに立つ加納マルタと加納クレタが丁寧にそれらをビニール袋に詰めてラベルを貼っている。

加納マルタが私に尋ねる。

「ホクナン様はどの部位をご希望ですか？もうすでに人気のあるところはなくなつてしまいましたので、どれでもおすきなだけお持ちになつてもかまいませんよ」

見ると、笠原メイの頭や手が漬け込まれた大きなピクルスの壺は木枠で梱包されて荷札が貼つて、いつでも発送できるように用意されている。解剖台の上には肋骨が二本、バラ肉が一ブロック、腸の切れ端が少々、そして右胸の乳房が残っていた。

加納クレタが、魚屋のおかみのように、それらをひよいひよいと手際よく袋詰めすると、袋の口を輪ゴムでくるりと結んだ。肋骨は紐で結わえて、持ちやすいように、取手をつけてくれた。そしてそれを私に押し付けて、畳み掛ける。

「もう、お仕舞いですから、残りはみんなもつていらしてください」

加納マルタがホースの水で、解剖台に残った血液や胆汁液みたいなものを綺麗に洗い流しながら、私に言う。

「なまものですから、今日中に、お召し上がりくださいね、しいたけ、春菊と一緒に酒粕で煮込むとおいしいですよ」

私が困っていると、加納クレタがすばやく肉片のパックを私から掠め取つて言う。

「それじゃ、これはわたくしがいただきます」

「そうね、クレタとわたくしとでおいしくいただきますね。

ほくなん様ごちそうさま」

そして、二人は「けけけけっ」と、笑い声を残して消えた。振り向くと、ルフィミアが立っていて、残念そうに呟く。

「あら、勿体無い、今年の笠原メイはおいしいのに…」

ルフィミアはそれから目玉がたくさん入ったウメボシを漬け込む壇を取り出して、さも、うれしそうに私に見せびらかす。

「ほら、ごらんになって、笠原メイの目玉漬けよ、ことしはたくさん獲れたので、こんなにいっぱいつくってしまいましたわ」

そう言つと、ルフィミアもスキップしながら消えていった。

結局、笠原メイの肋骨しか手元に残らなかった私は、乳房だけでも取っておくんだつたと後悔する。二本の肋骨を打ち合わせると、金属的な音がして、それが笠原メイの甲高い笑い声に聞こえる。

電話の音がしていることに気が付いて、目が醒めた。気分がすぐれない、時計をみると七時を少し回っていた。電話の主は加納マルタだった。

「もしもし、ほくなん様でいらっしゃいますか？」

「もしもし、ほくなんはわたしですが」

「お世話になっております。地中海クリニックの加納マルタでございます」

「…」

「折り入って、ご相談いたしたいことがございます、

今日の夕方など、ご都合はいかがでしょうか？」

「中川の指図ですか」

「ほくなん様が誤解されるのは、尤もなことではございますが、わたくしは中川氏に雇われているわけでも、中川氏の部下でもございません。ほくなん様に、わたくし個人としてのことなのです」

「じゃあ、いいですよ」

「それでは、午前十一時にプリンスホテルのロビーでお待ち申し上げます」

私は加納マルタと待ち合わせの約束をした。

。加納マルタによるある組織の説明

ロビーに着くと、加納マルタはクリーム色のレインコート姿で出て迎えてくれた。良く見なければレインコートなのか白衣なのかわからないので、彼女は病院からそのまま抜き出してきたようみえた。ラウンジの適当な場所を見つけて、コーヒートブルーベリーソースがこつてりとかかったレアチーズケーキを頼んだ。私は朝食をまだ摂っていない、食欲はないが、脳みそが糖分を無性に欲していた。加納マルタはイチゴに乗ったショートケーキを頼んだ。

「お時間を割いてわざわざお越しいただきまして、申し訳ございません。どうしてもいまのうちに、ほくなん様にわたくしの立場をご理解いただきたかったです」

「はあ」

私は気の抜けた返事をした。どうも加納マルタが弁解をする理由がわからない。中川が気に入らないのなら、面従腹背で適当にやっていたれば良い、なにも私を巻き込む必要はないはずだ。

すると加納マルタは、自分は『紫十字社』という組織の囑託で派遣されてきた調査員であると、説明した。

調査員というのは、平たく言えば探偵で、つまり、『紫十字社』という組織は、特定の人々だけを顧客にする特殊な興信所なのだ。

「女探偵な訳ですか」

「いえ、ほくなん様がお考えになっっているような

映画に出てくるようなものではございません。

書類を調べたり、役所の記録を探したりする事務的で

とても地味な仕事なのでございます」

「でも、医者に化けたり、人の家をみょうちきりんな理由をつけて家捜ししたりはするのですね」

加納マルタの尊敬語や謙譲語はおかしい、でも、どこがおかしいかというと、よくわからない。そのくせ、相手を苛立たせるには十分な違和感があるのだ。私は、ついいじわるくなってしまう。

「わたくしは正式にカウンセラーの資格を持っております。」

別に職業を偽ってはおりません。

ほくなん様のおたくで家捜しまがいのことに及びましたことは、中川氏の指示でございます。

わたくしは関係なかったとは申せませんが、決して調査員としての職務や、わたくしの意志ではございません。

しかし、まことに、ほくなん様には失礼なことをいたしました。

謹んでお詫び申し上げます」

「いえ、済んでしまったことですから、それはよいのですが、

私にはあなたが、こんな手間を取って私に協力を求めてくるのが、理解できないのですが」

加納マルタはなにから説明したらよいかと、考えている様子で、「そうですねえ」と言っただま固まってしまった。私はその間、チーズケーキを突つついて、コーヒで流し込んだ。

それから、加納マルタは自分が働いている『紫十字社』という組織について理解してもらわなければならない、と説明をはじめた。

「たとえば、ある方がご息女のために相応な伴侶を見つけてやりたいと、考えたとします。

その方が十分な資格があつて、わたくしども『紫十字社』の会員でいらした場合、『紫十字社』は、その方のご息女のための伴侶をデータベースから選び出し、その相手様の身上報告書を添えて、ご提案申し上げます。

この辺りは、結婚相談所と興信所が一緒になったようなサービスですので、ほくなん様にもご理解いただけると存じます」

「ただ、その人というのが十分な資産と社会的な地位を持っていないければ、その紫何とかの会員資格がないという違いがあるわけですね」

「そうです、でも資産や社会的な地位だけではなく、家柄や血筋も大切なのです。『紫十字社』の会員の方々は、『選ばれた家柄』なのです。

しかし、一方で、興信所としては如何なる結婚相手の身上でも調査いたします。身辺のうわさや評判から、人間関係、家族・親類の行状、血縁関係は五代前までは調査するのが普通ですし、日本国外の結婚相手の場合には、相手国の政府調査機関が協力してくださります」

「まるで秘密情報機関ですね」

「そうです、『紫十字社』は民間の政府外郭団体を装っておりますが、じつは情報機関なのです。

『紫十字社』のデータセンターに準備されているデータベースには、総務省統計局、厚生省などからの統計資料、警察庁などからの調査報告、人事院からの公務員個人資料、各企業からの職員個人資料などが、毎日のように登録されていて蓄積・管理されています。このデータベースを利用することによって、市町村の戸籍記録などといったものを調べなくとも、『紫十字社』は完璧な個人データを取り出すことができるのです。

そして『紫十字社』には全国に会員や準会員がたくさんいらつしやいます。準会員というのは『紫十字社』に協力関係にある組織、主に有名女子大学の同窓会とかですが、この方たちは『紫十字社』からの依頼があれば、調査対象の方の評判や噂を詳細に報告してくださいます。

つまり、『紫十字社』は完璧な国民個人情報データベース化して所有しているばかりでなく、忠実にして正確な情報を提供するエージェントを全国に張り巡らしているのです。

情報機関としての違いは破壊工作をしないことぐらいです。

いえ、それもわたくしが知らないだけかもしれません」

「でもそんなもの一体いつのまに、だれが作ったのですか」

そんな政府機関まで巻き込んだ、日本全国を蔽う組織を一朝一夕に作れるものではない。加納マルタの話を聞いていると、まるで仮面ライダーとかガッチャマンに出てくる敵役、悪の秘密結社ではないか、このぎこちない、ヘンな尊敬語を操る女も改造人間ではない

かと、私はまじまじと加納マルタの表情を覗き込んだ。

「戦前に日本軍は大東亜共栄圏の構想実現化のために、本朝の主要な血族とともに、中国の清朝、台湾の明朝、朝鮮の李氏といったアジアに版図を巡らせるために重要となる人脈を握る血筋を調査いたしました。」

また、植民地政策の支援としての人口計画を策定、研究する目的で専門の研究組織を関東軍に設け、これを二〇八優生人口部隊と称しました。清朝の皇帝だった溥儀を市井から見つ出してきたのもこの部隊です。

この組織の目的は、アジア各国の支配者層の血縁関係を網の目のように張り巡らせることによって、アジアの政治的な安定と、その頂点に立つ大日本帝國の地位を磐石なものとするところにあります。このために、南京、台北、東京に莫大な調査資料を蓄積、解析する施設を造り、張り巡らした情報網の拠点としました。

しかし、戦況の悪化とともに、これらの壮大な血縁関係計画は縮小され、スパイの検挙や、身元調査といった調査機能だけが残りました。終戦ともに組織は、その蓄積した書類をすべて消滅させて解体する必要があります。敵国米英がこの血縁関係の詳細な資料を入手するということは、日本という国の屋台骨を危くさせることに他ならなかったからです。

しかし、一計を案じたある人が、この組織を民間の調査機関として存続させる方法を考えついたのです。結婚相談所とか女子大学の同窓会といった組織にG H Qが興味を持つわけではありません。少なくとも、そこにそんな大それた資料が保管されているとは思えないでしょう。

『紫十字社』は戦前からある、もともとは二〇八優生人口部隊の隠れ蓑だった民間の結婚相談所の名前を使って、その全ての資料と調査網を引き継ぎました。もともと国策機関なので、政府機関には太いパイプがあり、有力政治家の覚えも良かったので、戦後は政財界のありとあらゆる『政略結婚』を演出することによって、高度成

長期の日本を支配してきたのです」

「なるほど、あなたのいう『紫十字社』というものがとんでもない組織であることは、良く分かりました。しかし、それと私があなたに協力することと、一体どういう関係があるのですか？」

私が喋っている合間に、加納マルタはすばやくショートケーキの上のイチゴをつまむと、自分の口のなかに入れた。それで、ちよつと飲み込むまで待ってくれというように、手で制すると、冷めたコーヒを啜って、ごくりと、飲み込んだ。そのひょうきんなしぐさと加納マルタのバカ丁寧な言動があまりにもちぐはぐなので、私はやはりこの女は改造人間かロボットではないかとの疑いを更に深めた。

「おっしゃることは尤もでございます。

わたくしは『ひつじ牧場』の中川様のご依頼が『紫十字社』に寄せられたことによって派遣されてまいりました。

たしかに、『ひつじ牧場』の経営母胎である小松崎家は『紫十字社』にとって疎かにできない重要な会員で、そのお嬢様の小松崎五月様も将来は『紫十字社』の運営に関わることになり得る重要な方でございます。しかし、『紫十字社』はわたくしのご説明申し上げましたとおり、民間の機関として存在しておりますが、所詮は『お役所』なのでございます。お役所は自分の益にならないことは、なるべく回避しようとしします。今回の調査依頼は結婚縁組みには全く関係ございません。

ほくなん様のご存知かどうか存じかねますが、小松崎五月様のご破談の件は、『紫十字社』が各方面への根回しをさせていただきまして、なんとか収まった次第なのでございます。しばらくはこの件を蒸し返すような事態は避けたいというのが『紫十字社』の本音なのでございます。

つまり、いま、小松崎五月様が出ていらっしゃられてはわたくしどもが、困るのでございます。

ご理解いただけるでしょうか」

「つまり、ぼくに笠原メイ、つまり小松崎五月の居場所か、連絡先を知っていても、『ひつじ牧場』の中川氏には漏らすなど、いうことですな」

「その通りでございます」

加納マルタは言いたいことを言ったという満足感からか、少し余裕な感じで、ワイルドストロベリー・ウェッジウッドのコーヒー皿の模様を確かめるように持って、コーヒーを啜った。

ウェイターが来て水のコップを取り替えていった。隣席にいた中年の夫婦が連れ立って立ち上がって、別の中年の夫婦を迎えた。ロビーに誰かを探している身なりのいい三つ揃いの男がボーイを呼び止めている。私のコーヒーカップは空で、底に茶色の輪ができている。

「それじゃ、ぼくはその『紫十字社』に貸しを作ることになるわけですね。ぼくは『紫十字社』の世話になることもないようだけど、どうやったら、その貸しを返してもらえるのでしょうか？」

私はまだこの人造人間にいじわるしたい気持ちが残っているようだ。なぜか、この加納マルタは、そのへんの棒で突っついてみたくなるような変な感じがするのだ。

「ほくなん様には、お礼といたしまして、わたくしは中川氏の情報をリークいたします。中川氏が今回のような行動に出る際には、わたくしが予めほくなん様にご連絡を差し上げます。危害がなるべく及ばないようにも努力させてもいただきます。ですから、ご連絡先をわたくしに常にお知らせくださるようにおねがいたします」

「なるほど、それでギブ・アンド・テイクだね」

私は自分の携帯電話の番号を加納マルタに教えた。加納マルタは「わたくしにお会いになったことはくれぐれもご内密に」と言ってロビーの雑踏の中に消えた。

あとでコーヒーとケーキ代を払ってないことが分かり、私が二人分の支払いをさせられた。ホテルのコーヒーは高すぎる。

○ホテル・イヨマンテ

家に戻ると家の前に黒いベンツのリムジンが停まっている。もう中川がしびれを切らせて乗り込んだのか、と逃げ腰になっていると、窓がすうと開いて中からルフィミアが手を振った。

「ルフィミアさん帰ってたんですね」

「るーちゃん」

「わかりました、るーちゃん」

「とにかく立ち話もなんですので、お乗りになつてください」

扉が思っていたほうとは逆に開いて、内部には対面で革張りのソファーがあり、ルフィミアはロングのフレアスカートを優雅に広げて座っている。

私が乗り込むと、扉は閉まって、滑るように車は走り出した。

「私つい昨日帰ってまいりましたの。」

荷物も解いてないのですわ、

でも、私ほくなんさんがご無事なようでひと安心ですわ。

ところで、『ひつじ牧場』の中川さんに、

捕まりかけたのですって？」

「その場はなんとか帰れたけどね」

「そこで私考えたのですけど、

ほくなんさん、しばらく雲隠れしていらしたらいかがですか？」

「雲隠れ？」

「でしゃばりかもしれませんが、

私ホテルを用意いたしましたの、

しばらくそこに泊まっていればどうかと思ひまして」

このリムジンからして、ルフィミアの用意したホテルというものがどれくらいの格式高いものか大体見当がつくものだ。そんなところに一晩でも泊まる金などないし、そもそも、いつまでホテル暮らしをすればよいのか目途が立たない、だいいちに、勤務先から追けられたら、どこに隠れているか直ぐにわかってしまう。

「大丈夫ですわ、お勤め先には私がこっそり工作して、ほくなんさ

んが長期出張ということにしておきますし、ホテルの警備は万全、地下の駐車場から専用エレベータで誰にも見咎められずに自由に出入り可能、費用はタダですよ」

「え」

私の心配を見透かすように説明するルフィミアの内容に、私は絶句した。つくづく、笠原メイの関係者とは住む世界が違うようだ。

ルフィミアはいたずらっぽく笑うと説明した。

「それは私の専用の部屋なのです。メイと一緒にあそぶときとかに時々使うだけ、かといって、空いているときにホテルの誰だか知らないお客様に使われるのも嫌ですので、いつも使わないままになっているのです。ほくなんさんでしたら使っても私構わないわ」

途中何度か交差点で停まったかもしれないのに、全然そんなことも気がつかないまま、ルフィミアのベントンは池の中で泳ぐ鯉のように音もなく、どこかのビル地下の駐車場に滑り込んでいった。

よく数えていなかったので不確かなのだが、ベントンは地下五階くらいまで降りていった。その駐車場は大型車を三台置けば一杯になるような、狭い場所で、防火扉のような頑丈な扉がついていた。

こんなところに連れ込まれて殺されても判らないだろうなと想像すると、『ひつじ牧場』の中川さんも怖い、このルフィミアも負けずに恐ろしいような気がする。

周りには配水管やらボイラーの蒸気管やらがパイプオルガンのように林立しており、正面のエレベータ入り口が、スポットライトでその赤い扉を禍々しく浮かびあがらせている。

ルフィミアが先になってエレベータに乗った。エレベータには開閉ボタンしかついていない、行き先は自明なのだ。だから階数表示も着いていない、停まったところが目的地なのだ。

多分十階以上は上昇したと思う、地下は五階くらいだから、せいぜい六階くらいに停まったと思ったが、そこは三十階以上ゆうにある部屋全面に展望が開けたとてつもないスイートルームだった。

「ちょっとした眺めでしょ」と、ルフィミアはその絶景の窓を背に

して微笑んだ。そして私を引っ張って、あちこちの部屋を案内しては説明をした。

「ここはホテル・イヨマンテ、私の実家が経営するホテルの別館ですの、といつても、ここの客室は殆ど自家用に使っているのです。税金対策ね」

「イヨマンテ？」

「アイヌの伝統的な儀式、熊の霊送りのことですね、熊はアイヌにとつての神であり、霊的な世界への媒介をする聖なる存在、その媒介となる熊に盛大な贈り物を霊的な世界へ届けてもらうことにより日常に霊的な世界から齎される現世利益への感謝を祈るお祭り、でもそうね、このホテルが他のチエーンのホテルよりも人気がないのもこの名前が原因かもしれないわね、日本人にはひょうきんに響きそうだし」

ルフィミアは旅館の女将みたいなことをいって、ちょっと考え込んだ。それでも、この名前は海外からの観光客にはそんなに不評ではないらしい。

たしかに道を聞くのにも、タクシーで行き先を言うときにも間違えようがないし、第一にサービスはそのへんの結婚式で食いつないでいるような三流ホテルとは比較にならない。たぶん、費用も考えられないほど高いだろうけど。

「朝と夕方にボーイが食事を運んでくるようにしてあります。

お昼はルームサービスを使ってください。

隣のリビングからホテル内部に出ることができますが、

しばらくは出歩かないほうがいいでしょう。

バーのお酒は好きなだけ飲んでください。

なにか、ご質問はありますか？」

「ぼくひとりでここに籠もる訳ですか？」

すっとんきょうな質問を私がすると、ルフィミアはゆかいそうに笑いながら私を茶化した。

「まあ、あまえんぼうさんなのですね、ほくなんさんは、

けれども今は本当に、危険な立場なのでから十分過ぎることというのはないのです。

でも、私もときどき顔をだしますわ、それともいま私を押し倒したい？」

「いえいえ、滅相もございません」

私はおどけて答えた。もう笠原メイだけで十分である、この上、ルフィミアを押し倒したとあつては、世界中から刺客が集まってくるに違いない。

「ところで、今の場所がある人に知らせておきたいのだけど、なんていったらいいだろう？」

「ある人って？」

そこで私はルフィミアに、加納マルタのことを話した。『紫十字社』という組織のこと、『ひつじ牧場』からの依頼によって派遣された加納マルタは、表面的には『ひつじ牧場』の依頼に対して忠実を装っているけど、実は『紫十字社』を代表する意向としては、今の時点で笠原メイに出てきてもらいたくないということ、そして私が加納マルタに協力する見返りに加納マルタは『ひつじ牧場』の動静をリークしてくれる約束になっていること、などなど。

ルフィミアは私の話を興味深そうに聴いていたが、ときどき首を傾げて、なにかを危ぶんでいるようだった。

「ふーん、お話はよく分かったわ、たしかに『紫十字社』は動いているし、『ひつじ牧場』は依頼をだしているはずよ。

それは私も知っているわ。

でも、加納マルタですって？

それは本名なの？」

「本名なんじゃないかな、因みに看護婦の名前は加納クレタ……」

「とにかく、ほくなんさんは人をむやみに信じてしまう傾向があるようね。それは長所かもしれないけれど、今の状況下では危険な短所としかいえないわ。少なくとも私だったら、そんな名前の人の言うことを信じたりしないわ」

そういえば確かにそうである。ふつうそんな名前を名乗られて、ハイそうですかと納得する人は全人類のなかでは、多分小数派に属する方だろう。

そしてその人達は笠原メイみたいな女の子に振り回されて、ルフィミアみたいな女の子の友人に、あぶないから助けてあげると唆されて、どこだかわからない場所に軟禁されたりするのだ。

「あとで私から、その加納マルタとかいう方に、
ほくなんさんの居場所を連絡しておきましょう。

でも、しばらくは静かにしていたほうがいいと思いますよ」

まったくその通りだ。私はルフィミアに加納マルタの連絡先を教えた。

「私は夕方には戻りますので、それまでよいこで待っていてくださいね」と、ルフィミアは「おほほほ」といった感じの笑い声だけを残して、紅い扉のエレベーターの中に消えていった。

ルフィミアの言い分も尤もなので、そのままでもいいかとも思ったが、ルフィミアが加納マルタに連絡する前に、加納マルタがなにかを私に知らせようとしたとき、加納マルタは困って私を探すだろう。それもよくないような気がする。

ひとりで何にも起こらないところで、何もしないでいると、悪い予感だけが真夏の入道雲のように、どんどん膨らんでいった。

とりあえず、加納マルタに所在を明らかにしておこうと思ってケイタイを取り出して電話をかけた。電話は五回目に出た。

「もしもし、ほくなん様ですか？」

「もしもし、加納さん？いま電話しててもいいですか、
ちよっとこちらの状況を説明しておきたいのだけけど」

「ほくなん様、ちよっと電話が遠いようなので、
もうちよっと、大きい声でお願いいたします。

どちらかへ避難なされたのですか？

中川氏のお話では、ご自宅にはいらっしやらないとのことですが」

どうしてもう、中川は私が自宅からいなくなったことを、知って

いるのだろうか、やはり監視がつけられていたのかもしれない。すると、早々に居場所を移したことは良かったのか。

「もしもし、加納さん、ぼくは今、ある人の勧めで、とあるホテルに雲隠れの最中なんです。それでなにか連絡があるときは、このケイタイでお願いします」

「もしもし、どちらのホテルですか？」

「……しつっこいけど、ほんとうに中川さんに教えたりしないですよね？」

「ご安心くださいませ、大丈夫でございますよ」

「ホテル・イヨマンテ」

「ホテル・イヨマンテでございますか？何号室でしょうか」

「わからない」

「もしもし？なんでございますか？」

「何号室かわからない」

「それって誰かに誘拐されたわけではないのですね」

「うん、少なくとも同意のうえだよ」

「とにかく承知いたしました」

「じゃあね」

この部屋には何でもそろっているが、なぜかテレビはなかった。本でも持って来ればよかったと、私は後悔した。

○地下道

テレビのない部屋、掃除、洗濯、食事の用意の全くいらぬ場所、窓からの景色はすばらしく、まるで下界の人間をすべて支配下に置いた帝王にでもなった気分にしてくれる場所、しかし本もないテレビもない話し相手もないければ、仕事をする必要もない。こんなところに一週間もいたら気が狂ってしまうのではないかと、私はなんとなく不安を覚えていた。

しかし、心配する必要はなかった。私は一日とそんな場所に閉じこもっていることなどなかった。簡単なことだ、加納マルタがあっさり私の居場所を中川にバラしてしまったのだ。

夕食を摂ろうとしているところに、例の紅いエレベータが開いて、加納マルタがこのこと入ってきた。おかしいなあ、ルフィミアの話では、そんなさつき場所を聞いただけの人間がすいすい入ってこれるような場所じゃなかったはずなのにと、思ったが、加納マルタは緊急の用事みたいだ。

「ああ、ほくなん様、こちらにいらしたのですか」

「どうしたのですか？」

「大変なのです、はやく一緒に逃げましょう」

「えっ、もうぼくの居場所がバレちゃったのですか？」

「もうしわけございません」。

盗聴器が仕掛けてあるとは気がつきませんでしたもので、筒抜けにわかれてしまいました。もうすぐ、表玄関から中川さんたちがやってまいります。はやくこちらへ」と、加納マルタに二の腕を掴まれて、食事をしようと握っていたフォークと一緒に、私はエレベータに乗った。エレベータには開閉ボタンしかない、行き先は地下の駐車場、すると加納マルタは自動車を運転して、ここまで来たのだろうか。

動き出したエレベータの中で、加納マルタはキーを取り出した。エレベータにはボタンは開閉ボタン意外にはないが、なんの用途に

あるのか鍵穴がひとつ付いている。キーはその孔にねじ込まれた。

エレベータが不自然な減速をはじめて乱暴に停まった。しかし、扉は開かない。加納マルタは差し込んだキーを反対方向に回した。すると、天井のメンテナンス用に関けられてゐる扉が開いて、ステンドレスの梯子が静かに下りてきた。

「ほくなん様、はやく上ってください。天井に上ると、エレベータの扉に向かつて右側に保守点検用の立て坑があるはずです。それを伝つて降りますと、都市地下で電話線や電灯線を通す地下道に出ることが出来ます。はやくしてください」と、加納マルタはまくし立てた。さすが秘密情報機関のエージェント、きつとこういう訓練を受けてゐるのだろうか、民間人の私の比ではなく手際がよい。

ところで、私はそんなたいへんなものに追いまわされてゐるんだつて、これではナチスに追いまわされるユダヤ人ではないか、私は捕まつたら殺されちゃうの？

私が梯子を昇りおわると、加納マルタも昇つてきて、梯子を元に収容して、メンテナンス口を閉めた。立て坑に据え付けられてゐる梯子を降りると、たぶん地下道に出た。というのも暗くてなにも見えない。途方に暮れてゐると、また、加納マルタが腕をつかんでひっぱつた。

「こつちです、足元が狭いですから氣をつけて」

加納マルタはこんな暗闇のなかで足元が見えるのだろうか、どんな私を引つ張つたまま、進んでいく、そのくせ私の目は一向に暗闇に馴れてこない、視界がないと百メートル歩いたか、一キロメートル歩いたか全然感覚がつかめない。私が加納マルタになにか話し掛けようとしたときに、彼女は突然止まった。

「着きましたわ、ここならしばらくは安全でしょう」

そういつて加納マルタが指し示したところには、ちいさな小部屋があるらしく、暗闇がそこだけもつと暗闇になつてゐる、酷いものだ、こんなところに縮こまつて隠れていなければならぬとは、ど

ういう罪を犯したというのだろう、罰金で済むならそっちにしたいところだが、たぶんこういうものの罰金は住宅金融公庫で三十六年ローンを組んでも返せないような金額になるに違いない、金がないからしかたないと、妙に素直に納得して、私は暗闇の二乗のくぼみに体を押し込んだ。

加納マルタも一緒に入ってきた、右隣に座っている加納マルタのふとももがすれてくる、右手のほうでもぞもぞする、女髪の毛の臭いが鼻をくすぐる、もうちょっとこのままでもいいかな、と思ってしまう。

「ねえ加納さん、喋っても大丈夫かな？」

加納マルタはまだ、もぞもぞと動いている、それがくすぐりたい。

「やれやれ、なんでこんなことに」

「まあ、運命として諦めたほうがすっきりするのではないでしょうか」

「あのとキメイと一緒にロードアイランドに行っていれば、こんな面倒にはならなかったのかもしれないなあ」

「それはどういことですか？」

加納マルタが今までの経緯を聞きたがったので、私は笠原メイとの出会いからをずっと語って聞かせた。どうせほかにすることはない、加納マルタは黙ってそれを聞いていた。

「ほくなん様はどうしてそのときに、

YESかNOのどちらかの答えをなさらなかったのですか、はつきりしないのは男らしくございませんね」

「ぼくもよくわからないんだ。でも、今考え直してみると、あれはぼくかなりの自己主張だったのかもしれないな」

「自己主張？」

「一度目は、デートの約束のつもりが逃亡の手助けをさせられて、次はルフィミアに頼まれたのだけれど、実際にはメイの言うなり、そして三度目の正直で選択を迫られた。YESと答えてもメイの選

択命令に従ったことになる、NOと答えてもメイの選択命令に従って答えたことには変わりがない。どっちにも答えなかったことが、ぼくにとって『ぼくはメイの命令に唯々諾々と従うだけの存在じゃないぞ』という自己主張だったのかもしれない」

「さんざん振りまわされたですから、しかたがないですわ…」

「それでも、ぼくはときどきメイがまたどこかで、無茶をしているんじゃないかと心配することがあるんだ。

メイはアメリカで無事だろうか」

「だいじょうぶ、メイはどこかで、きっと元気にやっているわ」

加納マルタは僕の頭を撫でた。暗闇でわからないが、その顔をほんの直ぐそばにあるように感じた。加納マルタはどんな髪型をしていたんだっけ、ショートカットだったけ、ロングだったら、こんなところに誰かと一緒にうずくまっていたら髪がからまってうごけなくなってしまうのではないだろうか、加納マルタの手のひらがやさしくゆっくりと私の後頭部を撫でていた。

つまり右手に押し付けられているものは加納マルタの乳房であり、右肩ののしかかっているものは、加納マルタの頭なのだろう、加納マルタの静かでゆっくりとした呼吸と心音が、からだを音波の媒体にして耳の鼓膜に伝わってくる。

どのくらい時間がたったのだろうか、ふと気がつく足音が近づいてくる。女のパンプスの音がひとつ、男のリーガルみたいな硬い靴底がひとつ、地下道のコンクリートにシールドで塗布されたペンキに吸い付く平べったい靴底のスニーカーがひとつ、三人の足音がこちらに向かって近づいていた。

懐中電灯の明かりが左右にゆれて、辺りが明るくなったとおもったら、三つの足音は目の前で止まった。

「ほくなんさん、もうでてきても大丈夫よ」

ルフィミアの声だった。緊張が解れて全身の力が抜けた。でも長時間狭いところに体を丸めていたので、筋肉が引きつって、思うよう

に動けない。

「るーちゃん、ここだよ、長いこと同じ姿勢でうずくまっていたので、筋肉がうごかないんだ。手をかしてくれないか」

私がなさない声をあげると、ルフィミアと一緒に来た男のひとりが手を貸してくれた。もう一人の男も肩を貸してくれて引つ張り上げてくれた。

「ほくなんさん、いいニュースと悪いニュースがあるの、どっちから聞きたい？」

「いいニュースというのは、ぼくがもう逃げ回らなくてもよくなったということじゃないのか」

「そうよ、でもそれは『ひつじ牧場』の中川さんが亡くなったからなの」

「中川さんが亡くなった、どうして？」

「交通事故よ、それも飲酒運転の長距離トラックに追突されたのあなたのせいではないわ、メイのせいでもない、あの人の運命よ」

「じゃあ、それが悪いニュース？」

「いいえ、悪いニュースは、私はそれをメイに知らせたいのだけれど、メイの行方がわからないの、

メイはロードアイランドの別荘にはいないの」

ルフィミアの声は落ち着いていて静かだったが、もうどうしたらいいかわからないという投げ遣りな気持ちにそのまま押しつぶされそうな緊張をはらんでいた。

たぶんそのまま泣きだしたい気持ちを必死に押さえつけているのだろう、抑制された感情で発せられたルフィミアの声がもう一度言った。

「私あたれるところは全てあたったの、でもメイはいなかった、ほくなんさん、なにか心当たりはなあい？」

重い沈黙が続いた。私はメイの居所なんか見当もつかない、ルフィミアに付き従ってきた男達は私に手を貸してくれたっきり、一言

も発しようとしな。私は立ち上がってようやく全身に血液が回り始めたのか、手足が温まり、しびれが取れてきた。

そのとき加納マルタが暗闇からすっくりと立ち上がった、加納マルタはまだ、私の傍らにうずくまっていたのだ。

「留美子、大丈夫よ、私はここにゐるわ」

「えっ、さっきなの…」

聞こえてきたのは加納マルタの声ではなく、笠原メイの声だった。懐中電灯に照らされて、長い髪ウィッグを外し、壇底メガネをとった加納マルタは、たしかに笠原メイだった。いや、小松崎五月だった。

五月は瑠璃子を抱き寄せると、二人の男に向かって言った。

「あなたたちうちの牧場の田崎と安里ね、

おねがい、私たちを中川のところへ案内して」

地下道は十メートル先に地上へ昇る連絡通路があった。メイと私は引きつった筋肉の体を、田崎と安里という男達に助けられてようやく地上へと帰ってきた。

留美子のリムジンベンツがすぐそばに待機していた。病人のように担がれながら車の乗り込むまでの間、地上の風は刺すよう冷たかったが、私は生きているという実感を痛さで脳髓に感じていた。

。マイ・デア・リトル・シスター

交通事故はなんの前触れもなく、透き通るように晴れた青空の太陽が降り注ぐご機嫌に明るくて見通しのよい道路で起こった。中川氏を乗せたBMWは化学薬品を積載したタンクローリーの後方からの直撃を受けてコンクリートの道路フェンスとタンクローリーに挟まれたまま五百メートル引きずられて大破した。

タンク内の化学薬品が爆発する危険があるため、そのあと一時間余り救急隊員は現場に近づくことができなかった。タンクローリーの運転手はBMWのクッションのおかげで、さして重症を負うことなく救出されたが、BMWの運転手はエンジンといっしょにフェンスに擦られてミンチになり、後部座席にいた中川は下半身を押しつぶされて、上半身は切断され路上に投げ出された。いずれにしても即死で助からなかった。

中川の遺体は葬儀屋によって丁寧に損壊した体を修復されて、ひつじ牧場の以前私が笠原メイを迎えに行った家に帰っていた。そこは親代わりの中川がメイを、五月を、育てた家なのだった。

ルフィミアのベンツのリムジンは、ひつじ牧場の一般用とは別の入り口からどんどん入っていき、五月の育った家の前で停まった。黒い喪服に身を固めた牧童たちが、神妙に入り口の辺りに立って迎えている。中川の遺体は家の一階にある仏間に安置されていた。

仏間といっても襖を全て開け放って、廊下まで合わせると三十畳敷き以上の広さがある。その広い場所にぼつんと蒲団を敷いて遺体が横たわっていた。

地球の裏側のアルゼンチンに仕事で出かけている五月の父母はあと三日戻ることができない。葬儀の準備は、牧場の事務頭の遠藤という人が手際よく指示をだして進められている。

ルフィミアは中川の仏前で手を合わせると、すぐもどると言い残して戻っていった。牧童や使用人たちは遠慮して席を外した、そして、五月と私だけがそこに残された。

「私の兄貴みたいな人だったの…」

修復されてはいるが痛々しい裂傷が残る中川の額に、五月は手のひら被せると、そこに体温がまだあるのではないかと、もう一度確かめるように、目を瞑り手の先に神経を集中した。

血の気がなくなって、死化粧によってようやくそれが人間の肌の色であると判る程度に白くなった中川は、蠟で作ったにせもののようないきがした。

後ろから、本物の中川が現れて五月と私の首根っこを捕まえると、こんどこそはおまえら逃がさないぞ、と顔を上気させていきり立つようなことが今にも起こりそうに思えた。

しかし、家の周りで葬儀の準備のために走り回る人のざわめきが聞こえて、開け放たれた日本間を煌々と照らしている蛍光灯のトランスが低い唸りを上げている、空気は滞り死臭を紛らわすために焚かれていた線香の煙はまっすぐに天井に昇ったきりで溜まっている。五月は泣くことはなかった、なにも言わなかった、本当に悲しいときに人は泣いたり騒いだりはしないものだ。

「ねえ、あのとき結婚してればよかったかな…」

どうせ嫌なら離婚だって、なんだってできるのだし」

誰に向かって言っているか判らないが、適当な言葉を見つけたことなど、私にはできなかった。誰も思い通り自分の人生を生きたことなどできないのだ。そして、だれか他の人のように生きることすらまだできないのだから、手探りだろうが自分の生き方は自分で見つけるしかない。

中川正吾は妹であり、娘である五月にだれか他の人のように生きることが望み、よい兄貴なり父親の代わりを務めようとした、五月は自分の生き方を手探りしている内に、只ひとり自分の親代わりになつてくれていた赤の他人の兄貴を喪った、それだけの話だ、よくあることだ。

誰も悪くなかった、誰も責められるべきではなかった、ただそこ

に何の救いもないことだけが当事者たちを当惑させるのだ。

「私って嫌な女よね…」

「それは違う、笠原メイの輝きはぼくにとって生きる喜びを与えてくれたし、中川さんだって、そうだったに違いないよ。」

ただ、中川さんはその輝きを大切にし過ぎたんだろうな、その輝きをはなつ炎が消えないように、シールドで囲って、風も雨の妨げにならない家の奥深くに仕舞い込んでしまおうとしたんだろう。結果的にそれは別の方向の事態を齎してしまったけれど、それを誰も責めることはできないことだ。

笠原メイは懸命に自分の生き方を探って、もがいてみせた、それは誰か他の人と同じように生きようとして失敗するよりはずっと正しい行為だ。そして、中川さんが死んだのは中川さんの行為の責任ではなく、同時に、笠原メイの行為の責任でもない、誰も責められるべきではない」

五月はそつと私に寄りそうと私の肩に頭を凭れさせてじっとしていた。

十一時を回ったところにルフィミアが戻ってきた。事務長の遠藤さんは五月の疲労を心配して寝るように勧め、この二階の自分の部屋で寝るのが怖かったら来客用の離れに寝場所を用意するといった。五月はここで寝るといい、ルフィミアは一緒に寝てあげるといつて、五月と一緒に二階に連れて行った、五月は落ち着いたら連絡すると私に残して言葉少なげに家の奥に消えていった。

私は事務長の遠藤さんに挨拶をして帰った。車で送ってくれと言われたが、なんだかひとりで考えながら歩いて帰リたかったので断った。朝までひとりで歩いていたかった。

牧場の中を冬枯れした牧草地を渡る風に吹かれながら、そういえば自分の家はここから随分と遠いんだなあと思っではいたが、それよりも、私はあの天真爛漫に明るい笠原メイにはもう二度と会えな

いような気がして、その寂しさをどうやって紛らわしたらよいかを
考えることで精一杯だった。